怪盗レイヴン③

AI博士と兄の影!?

秋木 真・作

シソ・絵

アルファポリスきずな文庫

目次

0 プロローグ 006
1 期末テストとため息 009
2 怪盗は、赤点禁止 014
3 偽者の怪盗レイヴン 022
4 怪盗に身分証明書はない 029
5 盗む権利 036
6 調査開始！ 041
7 闇オークションへの準備 049
8 仮面のオークション 055
9 落札者は、十二番 063
10 朝霧幸樹 070
11 久我イオ 079
12 私を盗んで 090
13 本物だという証拠 102
14 西扇 109
15 予告状 115
16 背負うもの 121
17 奪還開始 128
18 たった一人の侵入 134
19 予想外の歓迎 147
20 偽者との対決 156
21 お兄ちゃんの背中 163
22 二つの戦い 168
23 届かない背中 177
24 変わらないもの 183
25 エピローグ 189
あとがき 194

Contents

Character

朝霧幸樹

春香の兄。ある日、突然行方不明になるが……

沢田七海

春香の友人。いつも明るく元気。

久我イオ

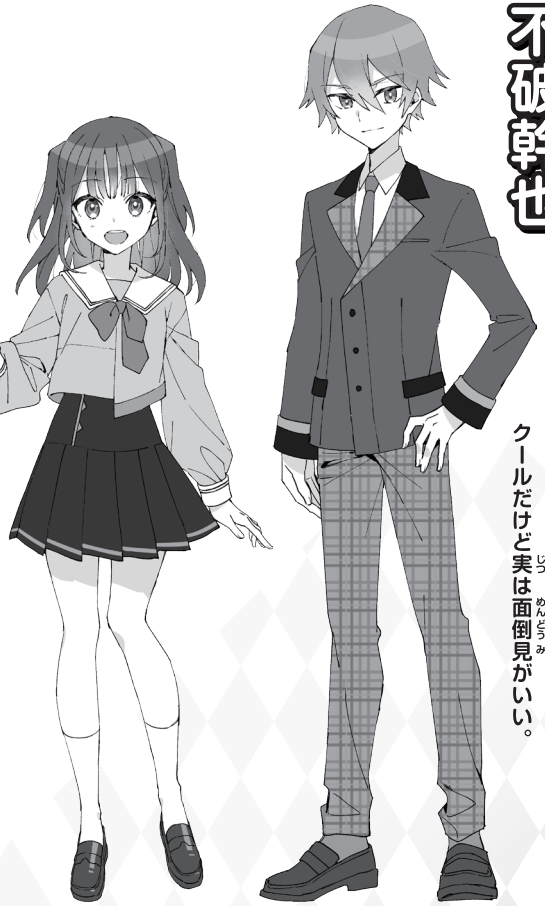
天才AI研究者。研究成果とともに失踪している。

田井中

怪盗レイヴンの活動に協力している資産家。幹也の親戚。

???

登場人物紹介



不破幹也

幸樹の友人で春香の相棒。クールだけど実は面倒見がいい。

朝霧春香

パソコンが好きな中学一年生。行方不明の兄を探して怪盗レイヴンになる。

怪盗レイヴンとは?

最近有名になった正体不明の怪盗。わるい企業や組織に潜入して、悪事の証拠を盗んでくるんだって! テレビでよく特集されているよ。

0　プロローグ

静かな夜のろう下に、金属工具の小さな音だけが響いていた。
男はドアの前で作業する女の後ろに立ち、周囲を気にしながら声をかける。
「開けられそうか？」
「もうちょっと……ここのロック、クセが強いんだから。……はい、開いた！」
ガシャン、と音がして分厚い鉄扉が開く。
二人は顔を見合わせニヤリと笑うと、鉄扉の向こうに体をすべりこませる。
部屋の中には、淡いライトに照らされた絵画がずらりとならんでいる。
どれも目がくらむような価値の名画ばかりだ。
「すごいな……これは盗み放題だな」
「値段を考えたら、ちょっとワクワクしてくるわね」
そう言いながらも、二人の動きには迷いがない。

一枚ずつ絵画を手に取ると、軽い足取りでドアの外に出た、そのとき――
ジリジリジリジリ！
その瞬間、ようやく警報音が鳴り響く。
「よし、仕掛けがちゃんと作動してるな」
「今さら鳴っても、もうおそいのよ。今のうちに出口まで行きましょ」
二人はまわりを素早く見渡し、ろう下を走り出す。
非常口から外へ出ると、むっとした夏の空気が肌にまとわりついた。
「うわ、湿気すご……。せっかく怪盗用に決めてきたメイクが台なしだわ」
「文句は逃げてからにしろ。――来るぞ！」
建物の陰から複数の警備員が走り出てくる。
二人はロープを使って壁をよじのぼると、警備員を見下ろして言った。
「おそかったな。この**怪盗レイヴン**の手にかかれば、おまえたちのセキュリティなど、造作もないことだ」
「そうよ。わたしたちの目的を、邪魔なんてさせないから！」

怪盗レイヴンを名乗る二人に、警備員たちが追いつく。
その表情は、おどろきに染まっていた。
「怪盗レイヴンだと！　おまえたちは義賊じゃなかったのか！」
二人は軽く手をふると、夜の闇へすっと消えていった。
取り残された警備員の一人が、あわてて通信機をにぎる。
「**緊急連絡！　窃盗事件だ。犯人は怪盗レイヴン！　怪盗レイヴンだ！**」

1　期末テストとため息

「つ、疲れた……」
わたしは、教室の机の上に身を投げ出すと、声をしぼりだした。
まわりをそれとなく見ると、あちらこちらに机に突っ伏している人や、ため息をついている人がいて、教室全体がどんよりしていた。
「おつかれー！」
そんなわたしのところに、元気のいい声を上げながら七海がやってきた。
くりくりとした大きな瞳が、わたしをのぞきこむ。
「……おつかれ」
わたしが力尽きたような声で言うと、七海はクスリと笑った。
沢田七海。わたしの一番の友達だ。
パソコンや**プログラミング**が趣味のわたしと気が合って、仲良くなった。

わたしはこの調子だっていうのに、テンションが高くいつものとおり元気がいい。
「そんなに**期末テスト**大変だった？」
七海が首をかしげる。
そう。わたしが疲れはててている理由は、その期末テストのせいだ。
中学生になって、初めての期末テストということもあって、気合いを入れて臨んだ。
……けど、今日は社会科や国語のテストだったんだよね。
わたしはわかりやすく理数や英語が得意で、文系の社会や国語系の科目が苦手だ。
「今日は歴史と国語だったからね」
七海はテストの内容を思い出した顔で、うんうんとうなずいている。
同じ理系かと思いきや、七海は全教科まんべんなく得意らしい。
そういえば、幹也さんと同じ塾に通ってるんだもんね。
「暗記は苦手じゃないけど、歴史の用語は覚えられないんだよ……」
「歴史は単純な暗記より、意味がわかったほうが覚えやすいよ！」
「興味がわかない……」

プログラミングの複雑な文字列や、計算式なら覚えられるのに、日本の歴史となるとまるで頭に入ってこない。
中大兄皇子と中臣鎌足、似たような名前で、いつも間違えるし。
ノートを見返しても、自分だけ話についていけてない気がしてしまう。
レイヴンの活動もあったけど、幹也さんがテストに集中させてくれたおかげで、ほとんど影響はなかった。
だから言い訳はできない。単純に、わたしができなかった、というだけだ。
それが少しくやしくて、胸の奥がきゅっとした。
「重症だねー。でも、テストもあとは得意な数学と理科だけだから、がんばれるでしょ」
「テストには変わりないけどね」
中学での期末テストは初めてだけど、この独特の張り詰めた空気も、ちょっと苦手かもしれない。
いずれ慣れるとは思うけど。
「それはしょうがないよ。学生の宿命だもん」

「そう割り切れる七海が、すごいんだよ」
「すごくないよー。苦手でもがんばれる、春香のほうがえらいんだよ」
七海はそう言って、ぐったりしているわたしの髪を優しくなでる。
まったりとしていたいけど、そうも言っていられない。
明日もテストは続くし、教室にいたクラスメイトも大半は帰っている。
「わたしたちも、帰ろうか」
バッグを持って、席から立ち上がる。
「だね。ねえ、春香。テストが終わったら、どっかでパーッと**打ち上げ**しよう！」
「いいね！　それを楽しみに、残りを乗り切るよ。……わたしたちのお小遣いで行けるところだから、コンビニでお菓子買うか、ハンバーガー屋さんだけど」
ハンバーガー屋さんは、同じ考えの人たちで混むから、コンビニでお菓子がいいかもしれない。
それでも、テスト勉強続きでしぼんでいた気持ちには、十分うれしい。
足取りがいくらか軽くなって、わたしは七海と一緒に教室を出た。
胸の奥にたまっていた重たいものが、少しだけほどけた気がした。

2　怪盗は、赤点禁止

学校を出て七海と別れると、わたしは制服を着替えて、ある場所へまっすぐ向かった。
家に帰って勉強……ではなく、やってきたのは築四十年以上たっていそうな、二階建ての古いアパート。
カンカンカン、と鉄製の階段を上がって、つきあたりの部屋に行く。
鍵を使ってドアを開けると、ふわりと紅茶のいい香りが鼻をくすぐった。
ここに来ると、学校の疲れが少しだけ消える気がする。
「**幹也さん**、来てたんですね」
わたしは、ダイニングチェアにすわる幹也さんを見て、笑顔になる。
ここは怪盗レイヴンのアジトだ。
幹也さんが、いろいろと伝手を頼って借りた部屋で、キッチンとリビングがあって、**アジト**として使うには十分な広さだった。

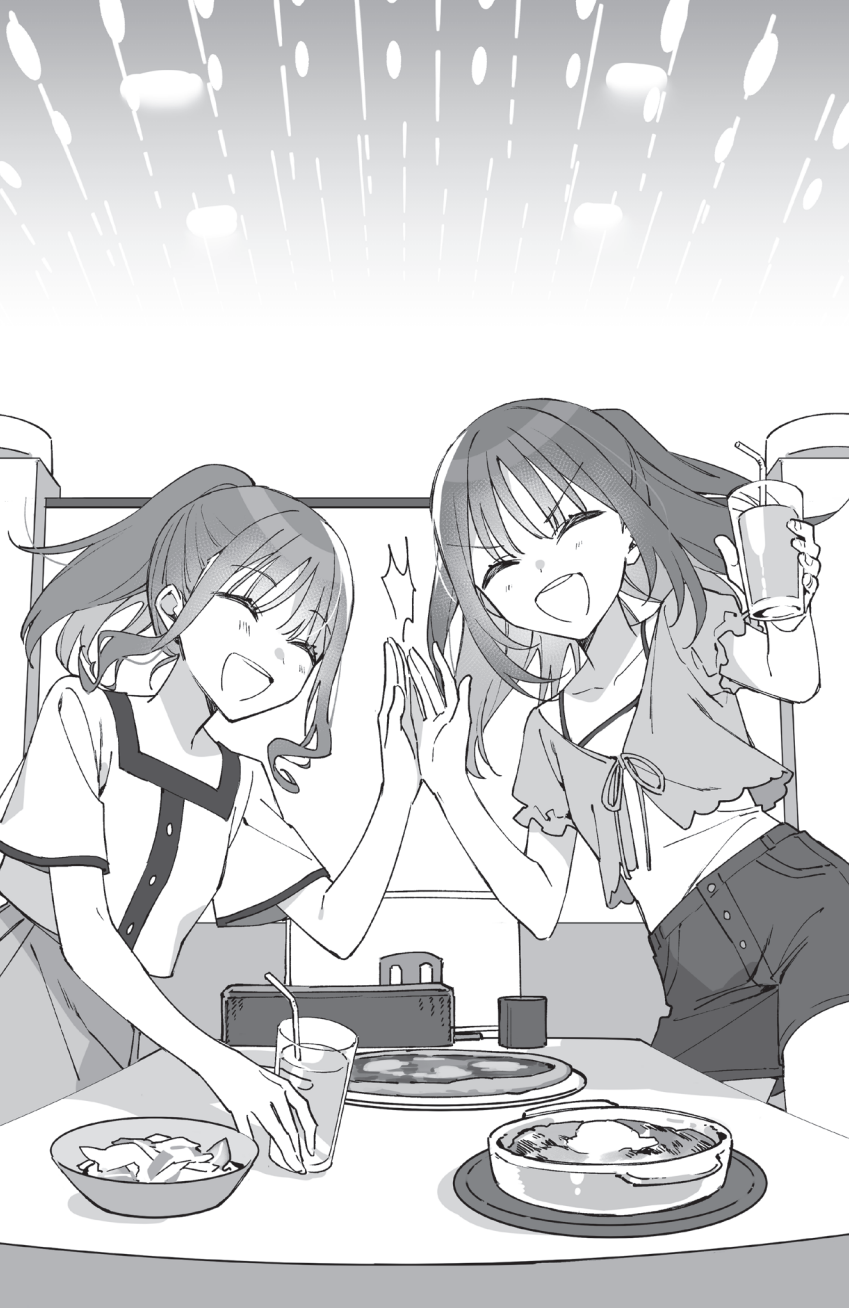
「さっきな」
答える幹也さんの視線の先には、テーブルにノートが広げられていた。
「勉強ですか？」
幹也さんの中学も、わたしとテスト期間がかぶっている。
いくら幹也さんが学年トップクラスの成績でも、さすがにテスト勉強は必要なんだ。
そう思っていたら、幹也さんが首を横にふった。
「いや。レイヴンの次のターゲットについて考えていた」
よく見ると、ノートに書かれていたのは数式でも英語でもなく、最近起きた様々な事件についての、詳細な情報だった。
いつ、どこで、どんな事件が起きたのか。
犯人は捕まったのか。被害者はどうしているのか。そんなニュース記事を軽く読んだだけでは追えないような情報まで、書きこまれている。
あらためて、幹也さんが遠くを見ている気がした。
「……テスト期間ですよね？」

わたしの記憶ちがいだったかと思い、確認してみる。
「テスト勉強は、ふだんの授業と塾の勉強で十分だ。そうすれば、レイヴンに時間を割ける」
「幹也さんと、同じ悩みを共有しようとしたのが、まちがいでした……」
わたしは肩を落としながら、イスにすわる。
「今日は、歴史と国語のテストだったはずだな。この間、勉強を見たんだ。成果はあったんだろう」
「……それなりに」
幹也さんに勉強を見てもらっておいて、あんまりよくなかったとは言えず、目をそらす。
実際、中間テストのときより手ごたえはあった。
でも、幹也さんの成績からすると、まだまだだよね。
「明日からは、得意な数学や理科なので大丈夫です！」
「それで余裕があって、こっちに顔を出したのか」
「はははっ……お見通しですね。苦手科目が終わったら、レイヴンのほうが気になっちゃって」
わたしは、頭の後ろをかきながら笑う。
目の前にいる**不破幹也さん**。
彼は中学三年生の先輩で、有名な進学校の**白鳳中学校**に通っている。
幹也さんとなぜ知り合いなのかといえば、ある目的を一緒に果たそうとしているから。
それはわたしのお兄ちゃんで、突然行方不明になってしまった**朝霧幸樹**を探すこと。
幹也さんは、お兄ちゃんの友達であり、仲間だった。
怪盗レイヴン。
巷をさわがせる正義の怪盗として、テレビ番組やニュースにもなるほど有名だ。
その怪盗レイヴンの正体が、幹也さんとお兄ちゃんだった。
そのことを突き止めたわたしは、幹也さんと一緒に怪盗レイヴンになったんだ。
――**行方不明のお兄ちゃんを、探し出すために。**
胸の奥で、その言葉が静かにわたしの気持ちと重なった。
お兄ちゃんが幹也さんに残していったリストがあり、そこには不正が行われているらし

い組織や企業の名前が書かれていた。
リストにあった、**シロサキ・グループ**と**イリディウム財団**。
まったくちがう企業と組織だったけど、どちらも裏で悪事を働いていた。
その両方に関わっている名前として出てきたのが、**謎の組織、セクターD**。
その中には、お兄ちゃんの名前もあったんだ。
「なにかわかりましたか？」
「いや。セクターDについては、まったくだ。表には出てこない名前だな。春香の解析のほうが頼りになりそうだ」
「ミライの苑で手に入れたデータですね。テスト勉強で解析が止まっちゃってて」
「かまわない。テスト勉強が優先だ。赤点の怪盗なんて、しまらないからな」
「そこまで、成績は悪くないですよっ！」
わたしが言い返すと、幹也さんが笑った。
それから不意に真面目な顔になる。
「まだ次のターゲットを、悩んでいるところだ。それに春香がいないところで、ターゲットを決めることはないから、安心しろ」
「幹也さんにそういう心配はしてないですよ。ただ、データの解析は早くしたいですけどね」
ミライの苑で手に入れたデータは、厳重なプロテクトと暗号化がされていた。
それを一つ一つ解きほぐしていく必要があり、簡単にはいかなそうだった。
テスト勉強に入る前に解析した分は、幹也さんに渡してある。
「赤点をとらない自信があるならいいが、そうじゃないならやめておけ。万が一、赤点をとったらレイヴンは休みだ」
「**えええーっ!?**　それは待ってくださいよ」
「なんだ？　赤点をとる予定があるのか？」
幹也さんが、ジロリとわたしを見る。
「な、ないですけど、なんかプレッシャーが……」
「学業と両立することが、条件だ」
考えてみたら、お兄ちゃんも幹也さんも赤点を心配するような成績じゃない。

上からすぐに数えられる成績の人たちなんだし。
「がんばります……」
わたしは、がっくりとうなだれつつ答えた。
それを見て、かわいそうに思ったのか、幹也さんが続けて言った。
「今のところ気になっている情報は、一つぐらいだ」
「あるんですか！」

思わず身を乗り出す。
「テストが終わったら教える。今日のところは帰れ」
気になって勉強どころじゃない。
……と言いたいところだけど、幹也さんにそんな説得が通じるわけがない。
「わかりました……」
素直に受け入れて、バッグを持った。
今はテスト勉強をがんばろう。
得意科目だからって、油断はしてられないし。
わたしは頭を切り替えると、幹也さんにあいさつをして、部屋を出た。



3　偽者の怪盗レイヴン

「**テストおつかれさま！**」
わたしと七海は、笑顔でお互いをねぎらい合った。
テスト最終日の放課後。
七海と一緒に、テスト期間終了のお祝いに、カフェに来ていた。
店内にはコーヒーの香りがふわっと広がっていて、それだけで気持ちがほどける。
ふだんはカフェなんてなかなか来られないけど、今日だけは特別だ。
そのために、制服を着替えてから来たぐらいなんだから。
「その様子だと、数学と理科は大丈夫だったみたいだね」
七海が、わたしの顔をのぞきこむようにして言う。
「たぶん。前半の国語や社会が心配だけど、赤点はとってないはず……」
自己採点を思い返して、小さくうなずく。

赤点をとったら、幹也さんにレイヴンの活動を止められそうだったし、ほっとした。
「苦手と言っても、赤点をとるほどじゃないと思うよ。心配しすぎだって！」
七海は笑って、わたしの肩をつつく。
「そうかもだけど、なんか小学校のときとテストの雰囲気がちがうから、ずっと緊張してたんだよね」
教室の空気もテスト前からピリピリしてたし、先生からもテストの点数が重要だと言われていた。
テスト範囲も決まっていたし、それに向けて勉強する空気みたいなのも強かった。
「たしかに。わたしは塾に通ってるから、テストのぴりついた空気にも慣れてるけど、最初はとまどうかもね」
七海は言って、カフェオレをストローで飲む。
塾って、そんな雰囲気なんだ。
勉強だけしにいくわけだから、学校みたいにゆるい空気の時間はあんまりなさそうだよね。

そのうち通わなきゃと思ってるけど、そう考えるとちょっとゆううつかも。
「せっかくテストが終わったんだから、勉強のことは今はいいんじゃない」
「そうかも。今は、なにも考えずに七海と話してたいし」
「そうそう！　べつのこと話そうよ。なんか話題あるかなー」
七海はそう言って、スマホを見る。
テスト期間中は、スマホもほとんど見ることがなかった。
見始めると、一時間ぐらいあっという間に過ぎちゃってるし。
テスト勉強の天敵だ。
「お、こんなことあったんだ。ねえ見て」
七海がなにかを見つけたらしく、スマホの画面をわたしに見せてくる。
有名なニュースサイトの記事らしい。
……えっ！
「なにこれ!?」
わたしは思わず、席を立ち上がる。

「ちょ、ちょっと春香。落ち着いて」
「ごめん……ウソでしょ」
謝って、席にすわりなおす。
それから、急いで自分のスマホでも記事を検索した。
「『**怪盗レイヴン、また美術品を盗み出す。五件続けての犯行**』。レイヴンって、義賊的な怪盗だったでしょ。盗みも悪事を暴くためっていう。でも、最近は方針転換して自分のために盗んでるみたい。やっぱり、怪盗は怪盗だったってことかなぁ」
七海は記事の内容を読み上げて、首をかしげている。
ありえないっ！
さっきまでの楽しさが、音を立てて消えた気がした。
わたしも幹也さんもそんなことはしてないし、する時間もなかった。
七海が読み上げた記事は、昨日の犯行だった。
昨日は、わたしは夜おそくまでテスト勉強で机に向かっていた。
そういえば……

昨日、アジトで幹也さんと会ったとき、「**気になる情報**」が一つあると言っていた。
それってまさかこれのこと!?
気になるどころじゃない。大問題だよ！
「ごめん七海、用事ができた」
わたしは、荷物を持って席を立つ。
「いいけど、春香ってそんなに、怪盗レイヴンのファンだったの？」
七海が、おどろいた顔をしている。
それもそうだよね。
一緒にテスト終了をお祝いするはずの時間を、途中で抜けるなんてよっぽどだ。
でも、知ってしまったら気になって、このあとの七海との時間を楽しくすごせる自信がない。
だって、本物の怪盗レイヴンは、わたしと幹也さんなんだから。
「そ、そうなんだよ。最近ハマっててさ。だから一大事なの！」
ただのファンだと、思ってもらうしかない。

最近、七海にウソばかりついていて心苦しいけど、こればかりは本当のことは言えない。
「わかったよ。わたしだって、新しいグラボに深刻なエラーが発見されたって言われたら、気が気じゃないもん」
「それはわたしも」
七海が場を和ませてくれて、わたしたちは笑い合う。
もう一度謝ってから、わたしは七海と別れてカフェを出た。
行くところは決まってる。
アジトだ。
幹也さんは、なにかつかんでいるかもしれない。

4　怪盗に身分証明書はない

転がるようにアジトにかけこむと、息が切れていることに、入ってから気づいた。
昨日と同じようにダイニングのテーブルに幹也さんがいた。
ティーカップがわきに置かれ、テーブルの上には紙が広げられていた。
「なんだ春香。今日は来ないという話じゃ……」
「これ知ってたんですか、幹也さん！」
わたしは、ニュース記事を表示したスマホを突きつける。
「気づいたのか」
幹也さんは肩をすくめる。
「こんなのやってないですよ。幹也さんだって」
「やってないな」
「だれかが勝手に、レイヴンを名乗ってることじゃないですか！」

怒るわたしとは対照的に、幹也さんは冷静に紅茶を飲む。
「そのとおりだ。**怪盗レイヴンの偽者**がいる」
「それがわかってて、どうして教えてくれなかったんですか？　まさか、放っておくつもりじゃ……」
「もちろん、許すつもりはない。ただ……」
「なんですか？」
意気込んでたずねる。
「春香が知ったら、こうなるだろうと思ったからな。テスト明けの息抜きぐらい、ゆっくりさせたかった」
「それは……気をつかってくれて、うれしいです」
思わぬ理由に、わたしのいきおいがそがれる。
「一日程度、変わらないからな。明日には話すつもりだった」
「それなら……いいんですけど」
言っていて、わたしがここにかけこんできたのは、たぶん焦りもあったんだと気づいた。

幹也さんに、頼りにされてないのかもって。
こんな大事なことを、相談してもらえない存在だったらどうしようと考えたんだ。
胸の奥が、ひやっと冷えた。
それが、怪盗レイヴンの偽者が許せない気持ちに、拍車をかけたんだと思う。
「落ち着いたか？」
幹也さんに聞かれる。
「はい……すみません。いきなりさわぎ立てて」
「焦るのはわかる。だまっていたのも悪かった。すわってくれ。調べておいたことを説明する」
「聞かせてください」
わたしは、幹也さんの向かいにすわる。
「偽者の犯行はすでに**五件**。美術品や貴金属や宝石類ばかりだ」
「犯罪を暴く目的だったりではないんですよね？」
念のための確認だ。

記事ではわからなかったことを、幹也さんがつかんでいるかもしれない。
「ないな。**純粋な窃盗**だ」
「ひどいっ……でも、どうしてレイヴンだって、わかったんですか？」
犯行予告でもしたのだろうか。
「盗んだあとに、『怪盗レイヴン参上』というカードを残したり、逃げるときに警備員に『怪盗レイヴン』だと名乗ったりしたそうだ」
「**なんですかそれ！**　みんなそれで信じちゃったんですか」
そんなので信じられるなら、だれでも偽者になれるっていうことだ。
「怪盗に**身分証明書**はないからな。ただ、偽者が信じられたのには理由がある。その手際のよさだ。五件ともセキュリティを難なく突破し、盗み出している。その盗みのあざやかさが、怪盗レイヴンだと信じられたようだ」
「その信じられ方は、複雑です。偽者もそれだけ腕が立つってことですよね？」
「そういうことだ。調べてみたが、どれも簡単に突破できるセキュリティではなかった。まるで怪盗レイヴンのようだ、と言われても納得するものばかりだ」

幹也さんがそんなにほめるぐらいだから、よっぽどなんだろう。
素直に感心してしまうのが、くやしかった。
「でも、わからないです。なんでそんなに腕の立つ泥棒が、わざわざ怪盗レイヴンを名乗っているんですか？」
「**警察の捜査のかく乱**や、**嫌がらせ**なども考えられるな」
「嫌がらせ、ですか？」
「泥棒からしたら、正義の怪盗は恨まれる立場だ。同じ盗みをしているのに、もてはやされているのが気に入らない、とかな」
「そんなの……！」
ただの逆恨み、と思ったけど、すんなり納得できてしまった。
目立つ存在は狙われやすい。
それは学校でも、世の中でも同じなのかも。
わたしもプログラミングの大会で表彰されたとき、クラスメイトに陰口をたたかれたことがある。

陰口をたたく子たちは、パソコンもプログラミングもしない子だった。
目立つだけでも、恨まれる対象になるんだって、そのとき知った。
「偽者がどんな存在か、なんとなくわかりました。それで、どうやって対策するんですか？」
「それについては、春香と一緒に考えるつもりだった。いくつか考えがないわけではないが、話し合ったほうがいい案が出るからな」
幹也さんは、当たり前のようにさらりと言う。
こういうところが、ずるい。
幹也さんは、ちゃんとわたしを頼ってくれる。
仲間だと思ってくれている。
それなのに、わたしはここに来るまでは不安に思ってしまった。
そのことを思い出して、頬が熱くなる。
「話が長くなるな。紅茶をいれ直そう」
幹也さんは立ち上がると、キッチンでお湯を沸かし始めた。

怪盗レイヴンに偽者が出てくるなんて、思ってもみなかった。
捜査のかく乱や嫌がらせ。
幹也さんがあげた理由は納得できる。
でも、わたしは引っかかりも覚えていた。
これだけ腕の立つ泥棒が、ただの偽者で終わる気がしなかった。

5　盗む権利

「はあぁ……おいしい」
幹也さんがいれてくれた紅茶を飲み、ほっと息をついた。
紅茶のフルーツのような香りが、部屋全体にも広がっている。
「今日の紅茶は、ダージリンのセカンドフラッシュだ」
「セカンドフラッシュってなんですか？」
「春に摘んだ茶葉をファーストフラッシュと呼ぶのに対し、夏摘みはセカンドフラッシュというんだ。コクと深みのある味から、紅茶の女王といわれている」
「へえ……たしかに、いつもの紅茶よりおいしい気がします」
説明されたからな気もするけど、幹也さんの紅茶はいつもおいしくて、比較がしにくいんだからしょうがない。
「味を楽しめばいいさ。さて、本題に入ろう。**偽レイヴンへの対策**だ。春香、なにかあるか？」
「思いついたのは、偽者だって世の中の人に知ってもらうことです。今問題なのは、偽者だとみんなが思っていないことですから」
「悪くないアイデアだ。しかし、どうやって知ってもらう？」
幹也さんに聞かれて、わたしは答えに詰まってしまう。
「……声明を出すとか？」
「あまりいい手とは言えないな。世の中の人間からは、どちらが本物か区別はつかない。下手をすれば、こちらが偽者にされる」
「う〜ん……たしかに。さっき幹也さんも言ってましたもんね。怪盗には身分証明書がないって。なら、偽者の次のターゲットを邪魔する、というのはどうですか？　犯行を行えなければ偽者が名乗ることもできないですし、妨害するわたしたちが本物だと信じてもらいやすくもなります」
「その偽者の次のターゲットは、どうやって知る？」
「高価な美術品をマークするとか……は無理ですよね」

世の中に、どれだけの高価な美術品や貴金属があるのかは、確認するまでもない。
その中で、偽レイヴンがターゲットにするものがどれかなんて、しぼれるわけがなかった。
思った以上に、やっかいだ。
わたしたちが本物だって、認めてもらうことすら難しい。
「だが、おれの考えも春香の案に近い」
「どういうことですか？」
「ターゲットを先に知るのは難しい。だが、**盗まれたものの行き先**を調べることなら、できそうじゃないか」
「あっ……盗まれたのはお金になるようなものばかり。つまり売るはずってことですね！」
目的が**お金**なら、盗まれたものを売るのが次の行動だ。
それにすでに盗まれたものなら、調べればわかる。
売るなら、**痕跡**は残るはず。

もちろん、表の世界で売れるようなものじゃない。
盗品を売りさばくような、**裏の世界**に流れるはずだ。
そこを調べられれば、偽レイヴンの手がかりがつかめる！
「いけますよ、それ！」
「調査には、春香にだいぶ負担をかけると思う」
幹也さんが、申し訳なさそうに言った。
「わたしにですか？」
ネットワークを調べるなら、わたしのほうが得意だからだろうか。
「ミライの苑で手に入れたデータの、解析を進めてほしい。そこに手がかりがあるかもしれない」
「それって……今回の件にミライの苑の裏にいた組織が、関係しているってことですか？」
「まだわからない。だが、気になっていることがあるんだ。進めてもらえるか」
幹也さんにしてはめずらしく、奥歯に物が挟まったような言い方だった。

今は言えるほど、確信がないということなのかもしれない。
だったら、わたしにできることをしよう。
「**まかせてください！** さっそく今日から解析を再開します」

6 調査開始！

幹也さんと役割を分担し、わたしはミライの苑で手に入れたデータの解析を進めることになった。
幹也さんは、盗品売買の情報収集担当だ。
わたしはアジトのダイニングテーブルで、ノートパソコンのキーボードに指をすべらせる。
テスト期間が終わったことで、解析は一気に進んでいる。
それでもまだ全体を解析するには、時間がかかりそうだけど。
……あれ？
ディスプレイに表示された情報を見て、手を止める。
「幹也さん、これ見てください」
わたしは、今解析できたばかりのデータが表示されたディスプレイを、幹也さんに見

せる。
「これは……**闇オークション**」
解析結果で出てきた言葉を、幹也さんが読み上げる。
「あやしいですよね。しかもこれ、**セクターD**が主催しているみたいです」
シロサキ・グループやミライの苑の事件に関わっていたと思われる、謎の組織。
そこが関わっているとなると、あやしさは倍増だ。
「オークションの出品リストは、データに入っているか？　こちらで調べた、偽レイヴンの盗品リストと照合したい」
「今、解析を進めてます。……出ました。

そっちに送りますね」
わたしは、出品リストを幹也さんのパソコンに送る。
幹也さんはノートパソコンを操作すると、眉根をよせる。
「当たりだ。偽レイヴンが盗み出したものが、出品リストに入っている」
「じゃあ、この闇オークションに行けば、偽レイヴンの手がかりが、手に入りますね」
「ああ……これはなんだ？」
幹也さんが目を細める。
「どうかしましたか？」
「見てくれ。出品リストに妙なものがある。『**盗む権利**』だそうだ」
「これって……！　『**どんなものでも盗んでこさせる権利となります。セクターDが保証いたします**』」
説明文を読んで、わたしは幹也さんと顔を見合わせる。
「きな臭い話だな。それにタイミングよく登場した、偽レイヴンとの関わりも気になる」
「まさか、偽レイヴンがこの『盗む権利』の実行犯？」

「可能性はあるな。腕の立つ泥棒なんて、そう多くはいないはずだ」
「ますます、闇オークションに行く理由ができましたね」
ここに行けば、大きな手がかりを得られるはずだ。
場合によっては、一気に偽レイヴンの問題が解決するかもしれない。
「それとセクターDが主催なら、**幸樹の手がかり**もあるはずだ」
「……っ！」
わたしは息をのむ。
幹也さんに言われるまで、その可能性を忘れていた。
いや。考えないようにしていただけかもしれない。
セクターDという謎の組織。
お兄ちゃんは、その組織に関係しているらしかった。
きゅっと、くちびるをかむ。
「そうですね。お兄ちゃんもいるかもしれません」
言葉にして、心臓が苦しくなる。

今のお兄ちゃんがなにを考えているのか、わたしにはわからない。
でも、会って話さなきゃなにも始まらないよね！
わたしは顔を上げて、幹也さんを見つめる。
幹也さんは、わたしのことをまぶしそうに目を細めて見ると、静かにうなずいた。
「そうだ。この情報を逃すわけにはいかない」
「闇オークションに忍びこみますか？」
怪盗レイヴンとして、闇オークションに忍びこむのが、いつものやり方だ。
でも、幹也さんは首を横にふった。
「裏の世界のオークションだ。警戒も警備も厳しいだろう。いつものように、隠れて忍びこむのはリスクが高い」
「じゃあ、どうするんですか？」
わたしの質問に、幹也さんはニヤリと笑った。
いたずらっぽい表情に、なにかとんでもないことを考えていそうな不安を覚える。
「忍びこむにも、いろいろ方法があるだろう」

ほとんど眠れないまま迎えた朝、教室はクラスメイトのざわめきでさわがしかった。
そんな中、わたしは教室の自分の席で頬杖をつき、現実と夢の世界を行ったり来たりしながら、うとうとしていた。
「おはよー！　春香」
突然、後ろから元気のいい声が聞こえたかと思ったら、背中を軽くたたかれた。
いつもなら、このぐらいなんてことない。
だけど、今は間が悪かった。
頬杖していた腕が外れて……

ガゴンッ！

大きな音が、教室中に響いた。
「ちょ、ちょっと春香、大丈夫!?　ごめん！　そんな強くたたいたつもりなかったのに」
七海が、あたふたしている。

「だ、大丈夫……ちょうど目が覚めたよ」
わたしは、今机にぶつけたばかりのおでこをさすりながら、顔を上げた。
教室のあちらこちらから、視線が集まっていて恥ずかしい。
「ああっ！　赤くなってるよ。保健室行く？」
「これぐらい心配ないよ。おはよう、七海」
笑顔を向けると、七海はようやく落ち着いた様子で、息をついた。
「その顔は、また寝不足？」
七海は心配そうな目を、向けてくる。
「テスト期間が明けたから、いろいろやりたくなっちゃって」
ウソじゃない。
闇オークションについて調べていて、ここ数日はあんまり眠れてない。
次の開催日が近くて、いそがなくちゃいけない。
「あんまり無理しちゃだめだよ」
「わかってる」

最近、いつも七海に心配されている気がする。
でも、ここはがんばらなくちゃいけないところだから。
ごめんね、七海。
心の中で、わたしはそっと謝った。
でも、寝不足になっただけの価値はある。必要なものは手に入れられたから。
あとは……動くだけだ！

7　闇オークションへの準備

「なにか問題があったのかな？」
幹也さんから急な呼び出しがあったのは、一時間ほど前のことだった。
『**アジトに来てくれ**』
用件だけの短い連絡に首をかしげつつ、わたしはアジトに向かっていた。
古いアパートの階段をトントントンとのぼって、突き当たりのドアを開く。
「幹也さん、急にどうしたんですか？」
玄関に入って、声をかけながら顔を上げたところで、わたしは固まった。
文字どおり、おどろいて体が動かなかった。
幹也さんのとなりに、**スーツ姿の見知らぬ男性**が立っていた。
怪盗レイヴンのアジトには、どう見ても場ちがいな存在だった。
「朝霧春香様。初めてお目にかかり光栄です。**田井中**と申します。本日のご案内は、私に

立ち読みサンプル
はここまで

おまかせください」
田井中さんと名乗った男性は、うやうやしく頭を下げる。
なにがどうなっているのか、さっぱりわからない。
年齢は三十代ぐらいだろうか。
品のよさそうな雰囲気と顔立ちを見て、ふと引っかかりを覚える。
この人、どこかで見たような……

「あっ！　ミライの苑まで迎えにきてくれた……」
捕まっていた子どもたちを逃がすために、幹也さんが用意したバス。
その運転席にすわっていたのが、この田井中さんだった。
「覚えていてくださったのですね。その節は、ごあいさつもできず、申し訳ありませんでした」
「い、いえ。よろしくお願いします」
中学生のわたしに、こんなに丁寧に接してくれる大人なんてなかなかいないから、どう対応していいのかわからず、困ってしまう。
でも、**味方**ってことでいいんだよね？
「幹也さん、どういうことですか。この人は味方なんですよね？」
「もちろんだ。おれの親戚関係の**資産家**で、レイヴンの活動に協力したいと申し出てくれたんだ。このアパートのオーナーでもある。ただまあ、ふだんからこの調子だ」
幹也さんは苦笑いして、田井中さんを見ている。
田井中さんは、物語の中から出てきた執事のように、壁際につつましやかに控えている。